

ドイツという国は、いろんな意味で日本に似ていて、計算機は研究機関で買上げてしまう。だから、計算機時間の使用に対しては料金は課されない。アメリカ人はそれを見て、ドイツ人は物理的なことを殆ど考えずに、何でも計算機にたたき込むと、言っている。これは、われわれ日本人が、最近までのアメリカ人に対して言ってきたのと全く同じことで、一部の真理と皮肉と負け惜しみの混ったものである。こうして、もしも日本の理論研究が巻返しに成功しなかったとしても、それを計算機のせいにするとはできないのである。

以上のようなわけで、日本の理論天文学が、いま、優位に立つことが出来ないのなら、いつまでもだめだということになりそうである。だがしかし、事情の変化は、日本が良くなったというよりも、むしろアメリカの状況が悪くなったことにあるのが、苦しい点である。実際、このようなことをいっても、現実には、日本における研究の発展を阻んでいる2つの大きな問題点がある。

その一つは、日本における研究の幅の薄さと、研究交流の不十分さである。アメリカの人口は日本の2倍だが、天文研究者の数はその比よりもはるかに多い。だから、アメリカの内部だけでも、研究を進めるための情報と討論相手にはこと欠かない。これに対し、日本では、多くの場合に、外国の研究者を相手にしなければならない。実際、論文のプレプリントを送ろうとした時、自分の研究内容に直接関係した人は殆ど外国にいることに気付く。(あなたはプレプリントも出さず、論文は何かか大学寄与に印刷するから、あなたの研究成果を知ることには不可能に近いといわれ、しょげている人がいた。)国際会議にはじめて出席し、外国人も案外たいしたことは考えていないので、十分にたち打ちできそうだと、考えた人もある。この考えを持つことは大切である。また、研究成果は適当に売出さないと、世界の研究の流れに組込まれない。日本における海外との研究交流や協力、ないしは研究発表の旅費はきわめてさびしい状況にある。一昔前には、若い人達が1~2年間外国で研究生活を送ることで、それが補われていた。しかし、最近では、受入先国の状況が悪くなって、若い人が外国へ行きにくくなっている。

最近の日本は急速に繁栄した。実際、どこへ行っても、日本人が多いのに驚かされる。われわれ研究者もそのような資金を持っていると、外国人は想像している。しかし、現実には多いのは、独身貴族やお金の余った企業が必要経費を増やすために行う海外視察である。そのうちに、国際レベルの仕事(研究)をしているが外国へ行ったことのない人は、大学の若い研究者だけという事態になりかねない。

そのような事情は、最近になって繁栄した国どうしで

は似ているらしい。外国での研究会に出席する旅費は、年齢の高い順にしかあたらないと、ドイツ人も歎いていた。ただ、それでも、ヨーロッパの状況は、日本よりもはるかに良い。学位取得直後の若い人達もいくつかの論文を発表していた。もっとも、ヨーロッパと日本では地理的なハンディキャップが比べものにならない。だからこそ、科学研究の世界でも、企業におとらず、国際化することにもっと積極的に取組まなければならないのではないか。(学術振興会や何々財団でそのような事が考えられているのは嬉しいことである。)例えば、IAUシンポジウムの開催地を日本へ持って来ることも、考えるべき事の一つであろう。

日本におけるもう一つの、そして最大の問題は、月給をもらって落着いて研究をしている人々が高齢化していることである。この現象はどこの国にもあるようだが、日本では、これは、オーバードクターのところ集中されている矛盾の表現である。だから、日本の理論天文学が巻返しに失敗したら、彼等から、それ見たことかと言われかねない。ここに、失敗の口実が出来た。だが、この口実を使うと、自己の存在にかかわることになる。

この最大の問題は、アメリカで考えたこと位では済みそうにない。日本でよく考えなければならないことなのである。

#### 寺田勢造さんの訃

内田正男

寺田さんは明治44年から昭和20年までの長い間、天文台で編暦関係の仕事をされていた。香気な昔のこと、第1次大戦後の3年間ほど自費でパリに遊び、帰ってまた天文台に勤められた。そのようなことからフランス語には堪能で、本誌に「芸術と天文学」(大正4年10月11月号)なる翻訳ものを載せておられるし、私の入った頃はいつも机上に原書を積んで読んでおられた。もっともその本は天文とは限らず、好きなアナトール・フランスなどの場合もあったようである。飄々とした人柄にひかれておつき合する人も多く、知友を語る寺田さんと接するたびに人徳のいたす所と、私はいつも感心して眺めていたものである。本誌18年6月号「平山清次先生の追憶」25年4月号の「小川清彦さんを憶ふ」などの寺田さんの筆になる追悼文を読めばそこにはその人柄がよくあらわれている。80才を超えてもいつも威勢のよかった寺田さんも、さすがに昨年頃より心身ともに弱り10月13日永眠された。高齢からくる脳軟化症で入院し肺炎でなくなられた。90才であった。ポンポンと元気のよい口調で奥さんとやり合っておられた寺田さんを思い浮かべながら御冥福を心からお祈りする次第である。